

# 十返舎一九編『東海道中膝栗毛』

萩原 義雄

作者十返舎一九と本書について



図版：十返舎一九、三代豊国、東京大学文学部国文学研究室蔵  
十返舎一九が一八〇二～〇九年に全八編の『東海道中膝栗毛』を刊行した。主人公弥次郎兵衛と喜多人が東海道を江戸から京都・大阪へ歩く旅を、各地の名物や失敗談などを盛り込み、当時のベストセラーとなった。「膝栗毛」は自分のひざを栗毛の馬に例えたもので、徒歩旅行の意味を云う。

この『東海道中膝栗毛』の版本資料を早稲田大学図書館が**古典籍総合データベース**「江戸のコレクション」に彩色版資料として

公開している。

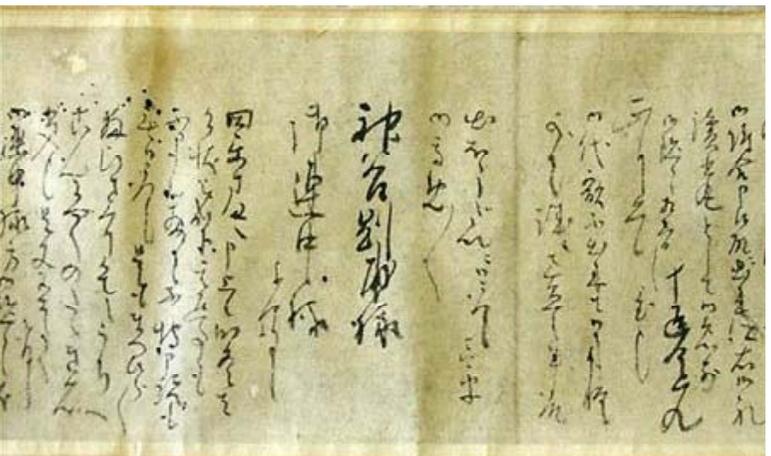
また、本年十二月六日付けにて、一九直筆の手紙が発見されたという新聞の報道がなされた。その全容収録記事については各新聞紙等でご確認願いたい。その要約として見出しをここに紹介しておく。

- 1, 弥次喜多道中の裏話も 十返舎一九の手紙見つかる〔朝日新聞〕
- 2, 十返舎一九の「年賀状」発見…膝栗毛の舞台裏も〔読売新聞〕
- 3, 「膝栗毛」舞台裏明らか 十返舎一九の書簡見つかる〔産経新聞〕

4, 十返舎一九：手紙1通見つかる 「膝栗毛」取材旅行のお礼〔毎日新聞〕

5, 膝栗毛、取材で“ネタ”仕込む 十返舎一九の手紙発見〔京都新聞〕

※公開された一九直筆手紙文の写真



神谷別甫様  
御連中様

十返舎一九

『東海道中膝栗毛』

(早稲田大学図書館蔵)

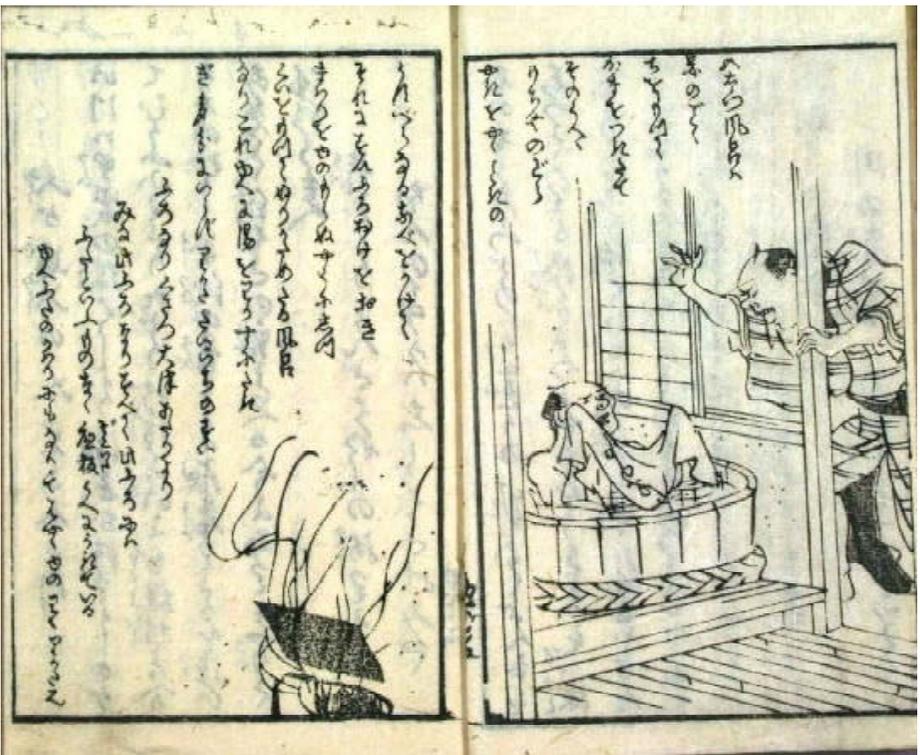
の挿絵とことば



「弥次さん さらばで ござります はなして  
下さりませ

「これく はやまるな まてく

「弥次さんを のけてほかの 男ハわしや いやく  
「なんでも いもうとめを くゝり つけねバ 身  
ども ぶしが たゝぬ



五右エ門風呂ハ圖のごとく、土をもつてかまをつ  
きたて、そのうへへ、もちやのどらやきをやくご  
ときの、うすぺらなるなべをかけて、それにすい  
ふるおけをきけ、まはりをゆのもらぬよふに、し  
つくひをもつて、ぬりかためたる風呂なり。これ  
ゆへ湯をわかすに、たきゞ多分にいらす、りかた  
だいいちのすいふるなり。くさつ大津あたりより、  
みな此ふるく、すべて此ふるには、ふたといふも  
のなく、底板<sup>そこいた</sup>うへにうきているゆへ、ふたのかは  
りにもなりて、はやくゆのわくりかた。

「べらぼう」表現

293 弥次 「エ、おきやアがれ、このべらぼうやろうめ。よくおれをとんだめにあはせやアがつた  
292 北 「どのさまはい、男だ。さぞ女中衆がこすりつけるだろふ 弥二 「べらぼうめ。いろ／＼なこと  
にせはをやぐへ。」

750 あとほう 「べらぼうめ。しつてあやしやるはずだ。駕かごの内道中記を見ていさしやるへ。  
北 「ハ、ハ、ハ、ハ、そんな謎などがあるものか 弥 「べらぼうめ。ありやアこそかけるは。」

903 弥二 「べらぼうめ何がおかしい  
北 「コレ／＼明松を買はねへか。この名物だ 弥 「べらぼうめ。もふ日の出る時分、明松がナニ  
いるものか

1010 羽宿での先生どふだ 向ふよりくる馬かた 「べらぼうめ。おれが先生なりやア、うぬははつつけだア  
つかる。べらぼうめ、やらうの猪じやアあんめへし、そんなもんがきられるもんかといつたら、  
すんならこりよきろとつて、ぬいみしろを売まいうつくれたとおもへ。

964 北八 「エ、つくなどいふにべらぼうめ じゆん礼 「それにべらぼうが  
いるもんか。そつちがべらぼうだ 北八 「コノ乞食めが トリきむはづみにいかゞしけん、かごのそ  
女 「ハイ／＼ 大市 「ときに今の川へはまつた、べらぼうどもはどふしたろふ  
ばつかり、外聞のわるい。國もの／＼つらよこした 弥二 「べらぼうめ、おれだつていかねへもの  
か。」

892 北八 「エ、おきやアがれ、このべらぼうやろうめ。よくおれをとんだめにあはせやアがつた  
やアがつて、このうちは卵塔場じやアねへかといやアがつたが、あのべらぼうめほど  
をべらぼうたア、なんのこつた

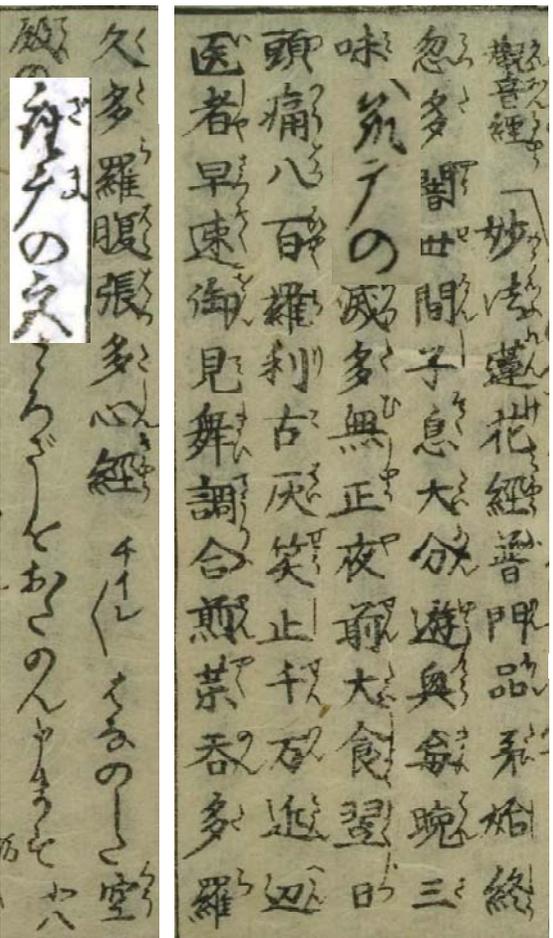
2901 その襖ふすまをぶつこかした、べらぼうといったア、おれがことだハ 旅人 「ハアこんたそのべ  
らぼうか 弥次 「ヲ、そのべらぼうだ 旅人 「ハ、ハ、ハ、ハ、べらぼうだからべらぼうといったが、  
い、しやアねへか

023 弥次 「へ、べらぼうめ。おれもそのくらひな事をしかねるものか。ハ、ハ、ハ、  
弥次 「なんだべらぼうめ。金銀があるまい。人を見くびつたことをいやアがる。  
弥次 「へ、べらぼうめ。アノむすめが、しやくしあたりのいゝのを、ほれたのだと

1033 北八 「なんだ、このべらぼうめ、さつきからそうてへ気にく  
北八 「エ、何をぬかしやアがる。きのつゑ、べらぼうだ  
してけつかるが、銭ないかい 弥次 「イヤ、このべらぼうめら、何をふざきやアがる  
へがべらぼうからおこつたことだ。さきは商賣だものを、しかたがねへ  
惣体上方べらぼうどもだ。左平 「イヤおまいがたがあたじやわいな。」

『妙法蓮華経』第八卷第二十五観世音菩薩普門品のもじり表現

観音經 「妙法蓮花經普門品第始終忽多聞、世間子息大分遊興每晚三味線、音曲滅多無正、夜前大食翌日  
頭痛八百、羅利古灰、笑止千萬、近邊医者早速御見舞、調合煎藥吞多羅久多良腹張多心經チイン／＼。  
はなのした空殿のこんりう。おこゝろざしをおたのん申ます 二編上・新編日本古典文学全集81一〇  
八」



漢字の文字資料  
 筑摩の「五編追加、日本古典文学全集305④」の「摩」省画文字「广」筑戸の鍋〔早稲田大学図書館蔵、六編上〕

座摩の宮〔八編下巻、日本古典文学全集480⑫〕の「摩」省画文字である「广」の文字  
 座戸の宮〔早稲田大学図書館蔵、十編上〕

其後の波及効果

膝栗毛は人気を博し、その後も一九による続編『続膝栗毛』五編（文化十一年刊）が編まれ、さらには二世一九による『奥羽道中膝栗毛』刊十四冊。〔十返舎一九著。嘉永二年刊〕やこの『東海滑稽膝栗毛』のダイジェスト版が後にお目見えする。

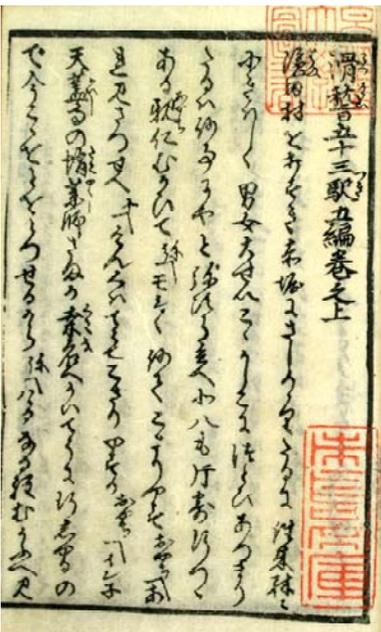
『滑稽栗毛の野次馬』一冊。文久元年（1861）辛酉年初秋。假名垣魯久作、一惠齋芳幾画。

一惠齋芳幾の「弥次・喜多」狂画を背景に東海道の宿場、日本橋↓川崎↓神奈川↓**横濱**↓**同吉原**↓程ヶ谷↓戸塚↓藤澤↓平塚↓大磯↓小田原↓箱根↓三島↓沼津・原↓吉原↓蒲原↓油井↓興津↓江尻↓府中↓鞠子↓岡部↓藤枝↓島田↓金谷↓日坂↓鹽井川までを一読していく筋立てとなっている。この後の続編が刊行されているかは未詳である。



※早稲田本の五編上は、「付言併凡例」〔日古典全集237頁〕から「やう／＼と東海道もこれからははなのみやこへ四日市なり／＼それより」〔254頁⑩〕迄の部分を欠落している。

また、右側の挿絵も歌川豊国画で、「冬物をあがりなされた人にくちをあかすはまぐりの茶屋 十返舎一九」〔日古典全集236頁〕とは図絵も異なっていて、「薬り合のちいる 雀乃はなしにハ やき蛤は舌をかくせり」と詞書きしている。末尾も異なり、五編下〔269頁〕の「おまな板なをしに鯉のひれふるはこれ佐用姫の石井でんかも」迄を記述している。従って、五編下の始まりも「津の入り口」となっている。



《参考資料》

- 1 新編日本古典文学全集・81…1995
- 2 日本の古典・15 安岡章太郎 訳…1976
- 3 東海道中膝栗毛 十返舎一九 著、笹川臨風 校註…1953
- 4 東海道中膝栗毛 十返舎一九 著、和田万吉 校訂…1928
- 5 東海道中膝栗毛 武藤元昭 校注・訳…1987
- 6 東海道中膝栗毛 十返舎十九 原著、土井重義 著…1943
- 7 東海道中膝栗毛 十返舎一九 著、村松操、千葉茂 校訂…1914
- 8 東海道中膝栗毛 十返舎一九 著、村松操、千葉茂 校訂…1914
- 9 東海道中膝栗毛 十返舎一九 著…1907
- 10 東海道中膝栗毛 十返舎一九 原作、村松友視 著…1992
- 11 東海道中膝栗毛 辻真先 構成、村野守美 作画…1990
- 12 東海道中膝栗毛 十返舎一九 著、中村幸彦 校注…1975
- 13 東海道中膝栗毛 麻生磯次 校注…1958
- 14 東海道中膝栗毛 十返舎一九 作、和田万吉 校訂…1937
- 15 碁太平記白石噺 国立文楽劇場事業課 編…1988
- 16 現代語訳日本の古典・21 杉本苑子 著…1980
- 17 絵本太功記…1999
- 18 雨月物語 森三千代 訳…1959
- 19 譚話浮世風呂・柳髪新話浮世床・東海道中膝栗毛…1909